



TITLE:

流星の寫眞

AUTHOR(S):

CITATION:

流星の寫眞. 天界 1935, 15(172): 392-392

ISSUE DATE:

1935-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167069>

RIGHT:

流 星 の 寫 眞

流星の撮影は、十一月の獅子流星の如きは例外として、大抵は他の目的による天空撮影の副産物として乾板に認められ、時には意外の研究材料を提供してくれるものである。

米國ハーバード大學天文臺は夜空の刻々の變化をカメラに収めることを自慢としてゐるが、大量に得られる寫眞乾板を測定中偶然發見される流星の數が多くなるのに刺戟され、特別な研究資金により七萬數千枚の所藏乾板を精査して213個の流星痕を發見した。

更に興味深いことは、同天文臺より約3キロ距つタフト大學との間に、1898年十一月14日同時撮影により3個の流星寫眞が得られ、それ等の流星の高度が計算されたことである。

流星の経路は乾板に示されたままを採用することは困難で、流星の距離により、大氣の清澄度により、乾板の種類により、乾板上の位置により、寫眞レンズの性能によりかなりの相異がある。

流星の高度は熟練した數人の觀測者が適當に距つた兩地で同時に觀測した結果から算出することが出来るが、もし特殊な流星、例へば著しい最大光輝點があるとか、経路が曲るとか、分裂するとかの場合には、兩觀測者の距離が僅に數キロであつても、撮影し得るものであれば、相當立派な結果を導くことが出来るものであつて、前記の米國に於ける結果は74—86キロといふ數字を出して私達を驚かしてゐる。

た よ り

謹啓（前略）生駒の天文並に氣象觀測所御設定 愈々御着手の趣き少くとも國家の大慶と奉存候。天文界に於ける業績の上から國際的に展望すると吾國は矢張り設備の上から從來人後に墜る様に被存候。折柄生駒山觀測所の建設は之れまでの御かみの仕事として又國際的のホンのオツキアヒ専門としての大衆から敬遠せられて居た學問が、愈々民衆化せらるべき時運到來のインデケータなりと觀する時、漫りに感慨深きもの有之候。斯の如きは一般民衆の研究心昂上に因る時象の一つなりと、片付くる譯には參らぬものと被存候。勿論、時代の影響は全然否定すること不能に候も一方民衆に呼びかけ、趣味を喚起し、そして之れを誘導するものが不斷の努力を拂はなくてはならぬものであつたことは痛感せざるを得ざる次第に御座候。（後略）

六月二十三日

津野田誠吾

山本臺長侍史